

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2024年10月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook http://facebook.com/shinran_bc

X (旧Twitter) https://twitter.com/shinran_bc

2024.10

第89号

自覚しにくい病巣と自我心

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

大乘仏教では自我の執着について、「我執」のみならず「法執」ということが問題とされる。この法執なる固執、特に生存と共なる法執は、六識において気づくことができる執着や煩悩ではない。大乘仏教において気づかれてきた見えざる執着である。いわゆる意識上に起こる煩悩ではない。意識できないが、生涯にわたって生存に影を落とす煩悩なのである。

人間の存在自体には、六根・六境・六識では説明できない要素がある。固有の存在を成り立たせている機能がある。それは六識として表層に現れる意識ではない意識、すなわち生命意識とでも言うべき深層意識である。寝ても覚めても生存そのものとして持続する意識、大乘仏教の唯識思想は、これに阿頼耶識という名を付与してきた。この深層の意識には、末那識と名付けられる自我意識が潜んでいる。この末那識相応の自我心こそが、大乘仏教が見出した執着たる法執ではないか。その在り方を、いま仮に生存を脅かす癌細胞に喩えて考察してみたい。

現代の先端技術は、生命の内に潜む病理解明により、癌の様々な病態を分析し、病状や患者の状態を十分に考慮して患者に直接、告知できるようになった。癌に対して、薬剤投与・手術・放射線治療などにより、完治する可能性が開かれ、告知が必ずしも死の宣告ではなくなったからである。半世紀以前には癌告知が患者に死を告げる事態で

あったことを思うと、時代の進展には瞠目の感を覚えるのである。

生命の根底たる遺伝子は、構造的に必ず自己が減びるように設計されているらしいが、癌とは、遺伝子を生み出すときの設計ミスとでもいうべき事態、すなわち限りなく自己増殖するような遺伝子が現れてしまうことであると、解明されているようである。すなわち生命体の活動の必然として、自己の内に自己ならざる自己を生み出すということ。本来なら自己の生存にそういうミスが発生しても、正常な生命活動なら事態をいち早く発見し、その異常な遺伝子を消すはたらきを持っているが、それが何かの異常事態で見過ごされた場合に、癌細胞となってはたらきだしてしまう。つまり、自己が自己の内に、限りなく自己を食い尽くす自己を生み出してしまうということらしい。言うなれば、生命体の内に自己の生存に死をもたらす自己が生じてしまうということである。

この生命体の自己の内なる敵としての自己自身、それこそ、法執として提起される自我心のもつ意味ではないか。この生存と共なる執着こそが、晩年に至るまで「無慚無愧のこの身にて まことのこころはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまう」(『真宗聖典』初版509頁、第二版622頁 東本願寺出版)と、親鸞聖人が悲歎述べ懐なされる事柄であろうと拝察しているの

自力をたのむということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



当センター所長・本多弘之による連続講座「親鸞思想の解明」では、「本願力回向の行信—『一念多念文意』を読み解く—」と題して、親鸞の『一念多念文意』を拝読している。ここでは、その第12回の一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

『一念多念文意』で親鸞聖人は「一念多念のあらそいをなすひとをば、異学別解のひとともうすなり」(『真宗聖典』初版541頁、第二版663頁 東本願寺出版)と言い、そして、「異学^{いがく}とは、聖道外道^{しょうどうげどう}におもむきて、余行^{よぎょう}を修し^{しゆ}、余仏^{よぶつ}を念ず^{ねんず}、吉日良辰^{きちりょうしん}をえらび、占相祭祀^{せんそうさいし}をこのむものなり」(同上)とされています。「異学」ということは、浄土門ではなくて聖道門である。聖道門というけれども、結局は吉日良辰を選ぶというようなことに現実にはなっている。だから、仏道というけれども外道に墮^{じりき}してしまふのだと。

「これらはひとえに自力をたのむものなり」(同上)。つまり、自分の力を頼りにするということは、自分の力は当然無限ではあり得ないから、それを脅かしてくるような要素を感じざるを得ない。それで何か日が良くないとか、何か場所が悪いとか、そういうようなことを言い出す。現代でも占いが非常に流行っています。人間として生きているからには、病気になったり、あるいは死別したりということも起こるわけですから、そういうことを嫌うということが、占いを信ずるようなことになるわけです。だから、「吉日良辰」とか「占相祭祀」とかいうものに、現代の人間も振り回されている。親鸞の時代は迷信が多かったから、などという問題ではないわけです。

「別解^{べつげ}は、念仏をしながら、他力をたのまぬなり」

(同上)。念仏を信じたつもりなのだけれど、自力が捨てられていないから、本当に他力をたのんでいないと。

「念仏をしながら自力^{じりき}にさとりなすなり」(同上)。こう押さえて、「^{べつげ}かるがゆえに、別解というなり」(同上)。だから、念仏をしていて阿弥陀如来に帰しているように見えるけれども、本当に帰していないということが「別解」ということで押さえられる内容なのです。異学であっても別解であっても、他力を本当にたのむことがないと。

そしてその後に、自力とは何であるかということ、「自力^{じりき}というは、わがみをたのみ、わがころをたのむ」(同上)。自我があるということをやまず立てて、その自我が力を持っていると信ずる。有限であるにもかかわらずわが身をたのむという心が抜けない。自分の力が有限であるとどこかでは感じているのだけれど、まずは自分を信ずる、自分に執着すると。自分に愛着してやまない。そういうわが身は頼りにならない、わが心も頼りにならないと本当に信ずることは容易ではない。

だから、わが身・わが心をたのむということが起こって、そして、「わがちからはげみ、わがさまざまの善根^{ぜんこん}をたのむひとなり」(同上)。自力だから、自分が修める行を頼りにして結果を求める。自分が行為したことによる善根功德、自分がこういうことをしたということ誇りにしたりたのんだりする。そういうことが自力なのだ。これが一念多念の争いの起こる一番もとにあるのだと、こういう押さえです。これは隆寛の『一念多念分別事』には特にそういうことは言われていないのですが、親鸞聖人は、一念多念の争いが起こる原因は、実は異学別解と押さえられる自力なのだ。自力の問題だと。自力とは何であるかということここを押さえておられるということなのです。

宗教と家族

— 教えの継承と多様性 —

親鸞仏教センター嘱託研究員 宮部 峻



家族は生活を営む場でありながら、ときにさまざまな葛藤が生じる場でもある。親の言うことに子どもはどこまで従うべきなのだろうか。家族に対して自分の抱えている悩みや抱いている考えを打ち明けることはどこまで許されているのだろうか。

仏教もまた、今日の家族をめぐる課題と無縁ではない。仏教と家族をめぐる関係は本来に矛盾を抱える。戒律は主として出家者に説かれてきた歴史をもつ一方、浄土真宗をはじめ日本の仏教教団の多くは、親から子へ信仰を継承するなど、伝統的な家族規範と結びつきながら発展してきた。ジェンダーに関して保守的な意識・制度慣行も残っている。

「家族」という場が抱えている今日的な課題に仏教の教え・歴史はどのように関わってきたのか。今日、仏教思想はそうした諸課題に応答し得るのか。

以上の問題意識のもと、2024年3月23日(土)に第5回「現代と親鸞」公開シンポジウムを開催した。タイトルは、「宗教と家族—教えの継承と多様性—」である。

登壇者には、菊池真理子氏(漫画家)、若佐顛臣氏(日蓮宗實成寺住職)、大谷由香氏(京都大学特定准教授)をお招きし、宗教2世と家族の問題、性の多様性と日本仏教の現代的課題、日本仏教と家族をめぐる歴史について発表していただいた。コメンテーターには武内今日子氏(関西学院大学助教)をお迎えし、ジェンダー研究の観点からそれぞれの発表を位置づけていただいた。当センターの加来雄之主任研究員もコメンテーターとして参加し、各発表の親鸞思想との接点を探った。

当日の議論から浮かび上がってきたのは、家族をめぐる問題を、決して当事者の問題として片づけるべきではなく、社会や歴史が絡む問題として

捉える必要があるということである。以下は、当日提起された具体的な論点である。

- ・ 親が子どもに対して信仰を強制することは子どもの人格形成にも影響を及ぼす。そうであるなら、信仰継承の問題を信教の自由を理由に家族内で解決すべきこととして捉えるのではなく、子どもの権利の観点から考えていく必要がある。
- ・ 仏教がなぜ性の多様性の問題に関わるのか。仏教に馴染みのない人、あるいは仏教者の中にも疑問を持つ人がいるかもしれない。しかし、もし、仏教が多様性の尊重を教えるものであるのだとすれば、仏教者はその問題に積極的に関わっていきけるはずである。
- ・ 仏典そのものに差別的描写を見てとる人もいる。しかし、そうした描写を釈尊本来の願いにもとづくものではないとし、新たな視点から仏典を読解し、仏説を受け止める営みもあったのではないか。
- ・ 私たちがさまざまな経験が交差するなかで生きる存在なのだとなれば、ある「誰か」が配慮すべき「特殊な存在」なのではなく、「誰も」が「多様な」存在なのである。宗教と家族は、過去から現代に至るまで交差し続けてきた。宗教と家族をめぐる問題に応答するためには、その交差の場面に目を向け、「当事者」と「非当事者」とを分けることなく、自他が共に問題を受け止めていく必要がある。

本シンポジウムの詳細は、『現代と親鸞』第51号に掲載予定である。今回の議論が宗教と家族をめぐる問題について議論し、考えるきっかけになることを強く願う。

相応学舎所蔵 安田理深筆録ノート群 に関する調査経過報告

「現代と安田理深」研究の一環として、相応学舎（京都市北区京極寺）所蔵の安田理深自筆ノートの一部を当センターに移管し整理調査することになったので経過を報告しておきたい。

（親鸞仏教センター副所長 加来 雄之）

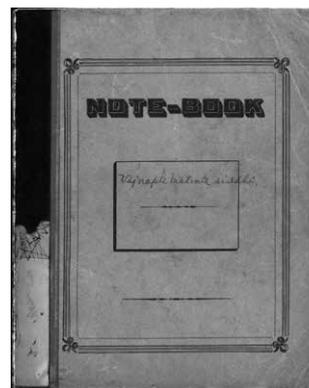
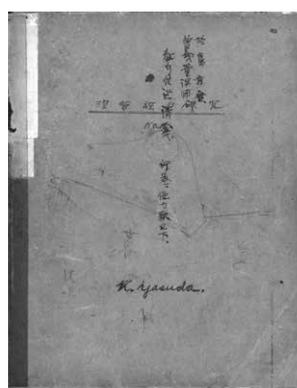
安田理深(1900-1982)は、清沢満之(1863-1903)、曾我量深(1875-1971)、金子大榮(1881-1976)に代表される真宗大谷派のいわゆる「近代親鸞教学」（本多弘之）と呼ばれる系譜に連なる仏教哲学者である。

*

1986年、京極寺の留守役で、『安田理深選集』（文栄堂書店）の編集事務を担っていた新田秀雄氏が京極寺の裏庭にある倉庫を整理したおり、「日記」と表書きされた木箱を2つ発見した。その中には安田の自筆ノート類が多数収納されていた。安田梅夫人によれば安田自身によって保管されていたものである。安田はこれらのノート類を貴重なものと見なしていたのであろう、1973年に京極寺が類焼したおりも安田自身によって持ち出された。焦げたノートが含まれていること、またノートの内容から判断して、一部のノートは焼失したと思われる。

新田氏の整理によれば、現存する安田の自筆ノートは大きく以下の4種に分類できる（『安田理深選集』第11巻月報参照）。

- 一 日記 26冊
- 二 みずからの講義のためのノート 34冊
- 三 随想ノート 15冊（『安田理深選集』「別巻」



全四巻として既刊)

四 その他（未整理）

「四 その他」には100冊以上の多種多様な内容をもつノート類が含まれ、いまだ整理されていないが、仮にノートの形態によって以下の4種に分類することができよう。

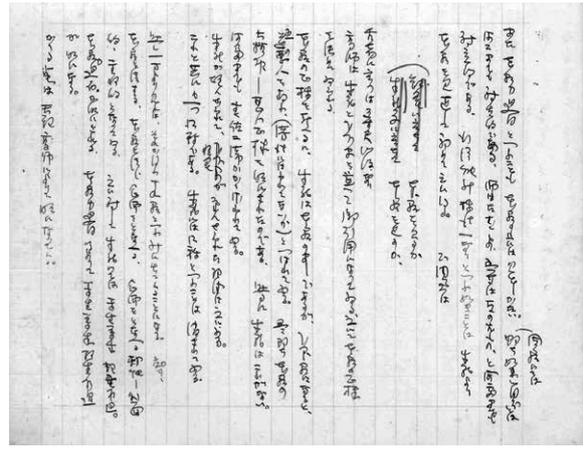
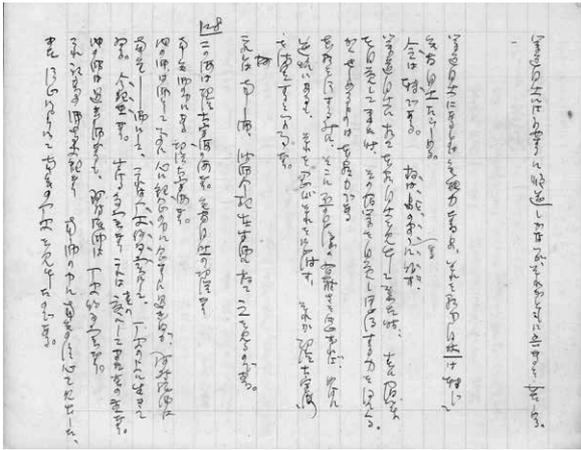
- (1) 日記帳（若い頃のもの）
- (2) 学生ノート
- (3) 原稿用紙
- (4) その他（雑記帳など）

報告者は2020年頃から「(2) 学生ノート」群の整理に着手していたが、幸い、2023年度の当センター研究事業の一環として「(2) 学生ノート」の調査研究が採択され、「一 日記」を除く資料を相応学舎から当センターに移管し調査を進めることになった。以下、「(2) 学生ノート」群の調査について簡単に報告しておきたい。

「(2) 学生ノート」群には以下の4種の内容が含まれる。

- (ア) 安田が大谷大学学生時代に受けた講義の筆録
- (イ) 安田が大学卒業以降に聴聞した講義の筆録
- (ウ) 安田自身の思索・研究・学習の記録
- (エ) その他

(ア) は、曾我、金子、西田幾多郎(1870-1945)、赤沼智善(1884-1937)をはじめとする当時の大谷大学の錚々たる教授陣の講義を筆録したノートである。また、清貧をきわめた安田の生活を反映してか、ほとんどのノートで余白（多くの場合は



【曾我量深の『教行信証』講義が含まれるノート（一部）】 ◀表紙（左ページ） ▲本文（上）

裏表紙から）を利用して（イ）（ウ）が記されており、（イ）の大部分を曾我による講義の筆録が占めている（次に多いのが金子による講義）。安田がこれらの学生ノート群を大事に保管した理由は、この余白に記された講義録にあったと思われる。

*

安田は、1900年、兵庫県の小地主の長男・亀治として生まれ、24歳で京都の大谷大学に入学した。その翌年に曾我が大谷大学教授に就任しており、安田は生涯、曾我を師として仰ぐことになる。生涯一書生を自認していた安田は可能なかぎり曾私の講義の場に身をおき、それを筆録することに努めた。ちなみに、曾私の初年度の講義が真宗学講座の「二河譬に就て」および大乘仏教講座の「了別と自証」であるが、これらの筆録も安田によって残されている。

長川一雄は、1944年に開講された曾私の『教行信証』「化身土巻」講義について、「[安田]先生でなければ[ノートに]取れない」（「安田先生の想い出」）と回想している。筆録については曾我に窺^{たしな}められることもあったようだが、安田はやめなかった。安田という曾私の思想をもっとも深く理解した門弟による講義の筆録はきわめて信頼のおけるものであり、これらの講義録の中にはおそらく安田の筆録によってしか残されていない未公開の貴重なものが多数含まれている。

本調査は、「近現代『教行信証』研究検証プロジェクト」との関係も考慮し、曾我による『教行信証』講義の筆録ノートの精査から開始している。それらの講義の時期や会処はさまざまであり、また安田が参席できていない場合もあり、重複する部分や欠落している部分はあるが、「総序」から「後序」までほぼ全体についての講義録が揃っている。

*

筆録ノート全体の本格的な調査はこれからである。現在は、上記の「(2) 学生ノート」群のPDF化、およびデータベース作成の準備をすすめている。ただ作業にあたっては以下の困難な問題があることも付記しておきたい。

- ・ 報告者には判読できない字体で記されたノートがある（初期の横書きのもの）。
- ・ 1冊のノートに複数の講義録が混在し、それらの原型を確定することが難しいものがある。
- ・ 会処や年月日を明示していない講義録のなかに、他の講義録との連関を確定し難いものがある。
- ・ 安田自身の思索か、他者の講義の記録か、判然としない文がある。

このような問題もあり、おそらく解読や分類にはまだ相当の作業と時間を必要とすると思われる。今後の調査方法やデータベースの公開方法などについては当センターと相応学舎とで検討を重ねて行きたい。

すみことなり。欲拯群萌は、欲というは、おぼしめすとなり。拯は、すくわんとなり。群萌は、よろずの衆生をすくわんとおぼしめすとなり。仏の世にいでたまうゆえは、弥陀の御ちかいをときてよろずの衆生をたすけすくわんとおぼしめすとすべし。「五濁悪時群生海 応信如来如実言」というは、五濁悪世のよろずの衆生、釈迦如来のみことをふかく信受すべしとなり。

《訳註》

五濁悪世…「五濁」は五種の社会的・身体的・精神的な汚れ、乱れ、衰えのこと。①劫濁（時代を重ね諸悪が加わり増すことによる濁り）②見濁（自分の悪を正当化し、他者の正しさを誤りとする見解の濁り）③煩惱濁（悪性ゆえに貪欲・瞋恚が盛んに起こるといふ煩惱の濁り）④衆生濁（初め純粹善良であった衆生が遂には悪をほしほしにやるようになるという濁り）⑤命濁（互いに害し合い、慈しみ育むことがない中で、短命でもろくなるという命の濁り）をいう。「悪世」は五濁によってけがされ邪悪がはびこる、この現実世界を指す。

現代語化をめぐる

「如来所以興出世」から始まる、この部分の「如来」とは何を意味しているのだろうか。

親鸞は、この銘文の解説において、原典である『大無量寿経』の文を引用した上で、その「如来」を「諸仏」であると押さえ直している。なぜ、そうするのだろうか。『大無量寿経』の「出世本懐」の文を説く当体は、仏陀釈尊なのだから、親鸞の念頭に釈迦如来があることは間違いない。しかしここでは、「如来」を「釈迦」という特定の個人に限定するのではなく、誰においてもはたらく法の真実性、目覚めの平等性に重きを置くがゆえに、親鸞は、「諸仏」と表現したのだと思われる。如来のはたらきに目覚め、それによって生きる者を、親鸞は、「諸仏」と解釈したので受け取った。

また親鸞は、『唯説弥陀本願海』、「ひとえに弥陀の願海一乗のみのりをとかん（説）」とするところに、その諸仏がたの仕事・使命を見出している。ただ一途に阿弥陀如来の海のように広大な本願、すなわち一乗の仏法の教えを説こうとするところが、諸仏の「出世本懐」、ずっと抱き続けてきた本来の願いであると、了解しているのである。

そして、『五濁悪時群生海 応信如来如実言』の二句を受けて、親鸞の解説に「五濁悪世」という言葉が出てくるのに対応して、初めて「釈迦如来」が出現してくる。そういう文章全体の流れがあると推察する。つまり、「釈迦如来」は「五濁悪世」の口中で、先の「諸仏の出世本懐」を成し遂げた。それが、「釈迦如来」の持つ固有性、真骨頂であ

すのは、すなわち諸仏がたと申すということである。「所以」とは、わけというお言葉である。「興出於世」とは、この世に仏がお出ましになると申すお言葉である。「欲拯群萌」の「欲」とは、お思いになるということである。「拯」は、救おうということである。「群萌」は、ありとあらゆる生き方をしていっているものであり、そのすべてを救おうとお思いになるということである。つまり、仏がこの世にお出ましになるわけは、阿弥陀如来の御誓いを説き明かして、一切の苦悩するものを助け救おうとお思いになるからだ、と知らなくてはならない。「五濁悪時群生海 応信如来如実言」とは、五種の濁りによってけがされ、邪悪が蔓延するこの娑婆世界における一切の苦悩するものよ、釈迦如来の真実のお言葉をその身に引き当て、深く信じて受けとめるべきだということである。

ると親鸞は見定めているのだろう。

親鸞は、『尊号真像銘文』「仏本」（親鸞八十八歳時の著作）において、「略本」（親鸞八十三歳時点での著作）では記していなかった「五濁悪世」と「釈迦」という言葉を、銘文の解説に新たに付け加えている。すなわち、この「如来」は「釈迦如来」に限定し、その「釈迦如来」の固有性を強調したのだと考える。ならば、その親鸞の意図は何なのか。恐らく「五濁悪世」という私たちの抱える問題の原点に立ち帰れと伝えたいのではないか。今、この現実世界を生きている私たちこそが、その当事者なのだ」と、親鸞は自己確認した上で、その意識を読み手にも喚起しようとしていると思われるのである。

問題提起

「正信偈」の銘文の二回目は、親鸞が、「如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如実言」という四句を解説した部分に焦点を当てる。注目すべきは、その結びの言葉、「五濁惡世のよろずの衆生、釈迦如来のみことをふかく信受すべし」という親鸞自身の自覚を通じた、読み手に向けての呼びかけである。その親鸞の「よろずの衆生」という表現は、天親の「一切苦悩の衆生」（東本願寺出版、『真宗聖典』（以下、『聖典』）初版一三九頁、

第二版一四九頁）の意に通じるものであると思われる。つまり、私たち一人一人がどのような生き方をしていたとしても、如来はそこに生死の苦悩という問題を見出し、それが如来の見抜く人間存在の如実の在り方なのである。教えられるのである。

いま現在、世の中は、戦争・紛争を始めとして差別・ハラスメント等々、様々な問題であふれ返っている。が、一方で苦悩の所在が見えなくなっているという感じを受ける。

なぜなのか。そこに、この世が煩惱渦巻く悪しき場所であるという事実を、自分は善き者である、善き者になれると思い込むことによって、ごまかしているという問題もあるのではないか。改めて、如来の「撰取不捨の真言」（『聖典』初版一五〇頁、第一版一六〇頁）、「絶対に見捨てなご」という真実の言葉のはたらきを深く信じる心が、人間同士、自と他が互いに背き合う現実をそのままに見て、本当に担っていく力をもたらすのだと、思った次第である。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池弘宣）

【原文】

和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文

「本願名号正定業 至心信楽願為因 成等覚証大涅槃 必至滅度願成就 如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如実言 能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味 撰取心光常照護 已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真実信心天 譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇 獲信見敬得大慶 即横超截五惡趣」文
（中略）※中略部分は『親鸞仏教センター通信』第八十八号に掲載

「如来所以興出世」というのは、諸仏の世にいでたまうゆえはともうすみのりなり。「唯説弥陀本願海」ともうすは、諸仏の世にいでたまう本懐は、ひとえに弥陀の願海一乗のみのりをとかんとなり。しかれば、『大経』には、「如来所以興出於世 欲拯群萌 恵以真実之利」ときたまえり。如来所以興出於世は、如来ともうすは、諸仏ともうすなり。所以というは、ゆえというみことなり。興出於世というは、世に仏いでたまうともう

【現代語】

「和国」の愚禿釈の親鸞の『正信偈』の文 ※銘文の全文は略する。
（中略）※原文参照

「如来所以興出世」とは、諸仏がこの世にお出ましになるわけは、と申す仏の教えのお言葉である。「唯説弥陀本願海」と申すのは、諸仏がこの世にお出ましになる本懐は、ただ一途に阿弥陀如来の海のように広大な本願、すなわち、一切の衆生を乗せて同一に仏に成らしめる、そういう仏法の教えを説こうということである。そうであるから、『大無量寿経』（『仏説無量寿経』）には、「如来所以興出於世 欲拯群萌 恵以真実之利（如来、世に興出したまう所 以は、群萌を拯い 恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり）」と、お説きになられている。「如来所以興出於世」とは、「如来」と申

センターの動き

2024年3月23日、「宗教と家族—教えの継承と多様性—」のテーマのもと、第5回「現代と親鸞」公開シンポジウムをオンラインで開催。登壇者は菊池真理子氏（漫画家）、若佐顛臣氏（實成寺住職）、大谷由香氏（京都大学特定准教授）。詳細は本誌に掲載するとともに『現代と親鸞』第51号に掲載予定。

2024年6月29日、「戦後歴史学と宗教研究——教科書からこぼれおちたものを「民衆」・「宗教」からみる——」のテーマのもと、第6回「現代と親鸞」公開シンポジウムを開催。会場は東京大学法文2号館1番大教室。飯島孝良嘱託研究員（花園大学国際禅学研究所副所長）、近藤俊太郎氏（本願寺史料研究所研究員）、繁田真爾嘱託研究員（東北大学大学院国際文化研究科GSICSフェロー）からの問題提起を受け、ディスカッサントに加藤陽子氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）をお迎えして全体討議を行った。詳細は次号ならびに『現代と親鸞』第51号に掲載予定。

人事異動の報告（2024年4月～8月）

着任	副所長	加来 雄之	(2024年7月1日付)
	事務長	里雄 亮意	(2024年7月1日付)
	主事補	岩崎 径	(2024年7月1日付)

再任	嘱託研究員	田村 晃徳	(2024年4月1日付)
	嘱託研究員	長谷川琢哉	(2024年4月1日付)
	嘱託研究員	伊藤 真	(2024年4月1日付)
	嘱託研究員	青柳 英司	(2024年4月1日付)
	嘱託研究員	宮部 峻	(2024年4月1日付)
	嘱託研究員	繁田 真爾	(2024年4月1日付)
	嘱託研究員	菊池 弘宣	(2024年7月1日付)
	嘱託研究員	越部 良一	(2024年8月1日付)
	嘱託研究員	飯島 孝良	(2024年8月1日付)

再任(兼任)	嘱託研究員	名和 達宣	(2024年4月1日付)
	嘱託研究員	藤原 智	(2024年4月1日付)
	嘱託研究員	中村 玲太	(2024年4月1日付)

上記3名は真宗大谷派教学研究所と兼務。

離任	主事	小林 信	(2024年7月1日付)
----	----	------	--------------